
三途の川へようこそ。（仮題）

なまくらん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三途の川へようこそ。（仮題）

【Nコード】

N1754BA

【作者名】

なまくらん

【あらすじ】

彼の歴史は鬱蒼とした木々が生い茂った森から始まった。

二人の仲間と共に、死後の国『三途の川』で、探し物を捜しに、旅に出る。

エブリスタでも連載しております。

「天使と魔術師は、死者を三途の川へと誘う」

(……解らない)

少年は試しに頬を掴ってみた。痛かった。

悲しいことに、どうやら夢の中にいる訳ではないようだ。

周囲は、木々の緑で囲まれていて、人っ子一人見当たらない。

辺りを見回しても、それは変わらず、静寂が辺りを支配していた。自分の服装は、上下共に赤の長袖ジャージで、この森との関連性を推し量るものは何一つとして存在していない。

空を見上げて、そこには葉っぱの間をかい潜って差し込む陽光しかなかった。

途端に八方塞がりの状態に陥った。

「昼……なのかな」

独り言を呟いても、「独り」である以上、やっぱり答えは返ってくるはずがない。

この場にただ立ち尽くしていても何も変わらないので、足を動かす。身を焦がすような焦燥感に引きずられ、自分が思う前へと、ただただ進む。

歩きたびに、土を踏む独特の感触が足の裏から伝達される。スニーカーが土で汚れるが、それを気にする余裕などない。

少し歩いたときだった。

視界に、光が差し込んできた。闇に慣れていた眼球が、それを許容するのを薄目を開けて待つ。

その光は先ほどの、微かな陽光とは違い、強い明るさを纏った光だった。

自分の進むべき”前”に、ゆっくりと向かう。

すると、開けた先にあつた風景——コンクリートで舗装された地面、闇夜を切り裂く人工の光で照らされる人々の喧騒という、見慣れていると”思われる”風景が飛び込んできた。

思わず、あるべき記憶の中に在籍している日常があることを安堵する。

そこには、せわしなく動く人、絶え間なく通り過ぎる車。何一つ変わらないと思われる日常。

だが、ふと思った。

釣り合っていない――、と。

（昼だったはずなのに、何故、空が暗い？）

どちらが異質で、どちらが真実なのかは分からない。

もし、ここが田舎で、森がたくさんある、というのなら疑問を持たないだろう。

だが、見る限り、そんな田舎風景は見当たらなかった。

むしろ逆。聳え立つビル群がそこにはあるだけだ。

（じゃあ、あの森は――？）

と、疑問を浮かべ、すぐさま解決すべく、来た道を振り向く。もしかしたら、「。。。庭園」のような、重要文化財などだと思ったからだ。

「――っ！」

僕は驚愕に、瞬きを忘れ去ることになった。

なぜならそこには、出てきたはずの森は消え、都会の町並みに飲み込まれたかのように、ただの路地へと変貌していた。木々などただの夢であつたみたいだ。

ちらりと、後ろを見る。道路があつた。ビルがあつた。都会の風景だった。

しかし、人が居なかった。数秒前には、いたはずなのに。車も、走っていないかった。

ごくり、と唾を飲み込んだ。現実を否定したくなつたが、眼球をしっかりと虹彩を結んでおり、否定できない。

（こうなったらヤケだ！）

ここで、なにもせずに突っ立っておくだけなのは怖かった。だから、恐る恐る、路地へと足を向ける。

すると、目の前の空間が歪んだ。そして歪みは、まるで絵の具を
全色混ぜたような渦を作り、路地を飲み込んでゆく。

恐慌し、すぐさま引き返そうとする。だが――。

（立ち去れない――っ！）

渦は引力を持って掃除機のように僕を飲み込んでゆき、そらに悪い
ことに、都会の風景さえ消え、背後にも渦が迫っていた。絶体絶
命だった。

（……もう、どうとでもなれ）

観念して、息を大きく吐き、襲い来る流れを享受した。

目を開け、周囲を確認してみる。

するとそこには、ぽつん、と平凡な一軒の日本家屋があった。

逆に言えば、それしかなかった。

自分のいた世界では、どこにでもあるような、家だ。実はさっき
までのが夢でかもしれない。

しかし、なんてことを期待したのだけれども、夢にしてはリアル。
それを裏付ける確固たる証拠があった。スニーカーが土で汚れてい
たのだ。空は青くて、雲ひとつ無く、広がるのは清々しい程の地平
線であり、それは僕の心とコントラスト。一瞬にして、希望はシャ
ボン玉のようにすぐさま消えてしまった。

行くあてもなくなり、とりあえず地面に腰を下ろす。真っ白な床
は、固くて、少し痛かった。

別に汚れるとか気にはしない。

よっこらせ、と自然に言ってしまった自分になんともなく悲壮な気
持ちがした。まだ若いはずなのに。

視点が上から少し下へと推移ただけで、残念ながら、辺りの景
色は変わってくれやしなかった。

地面に寝転がる。

自分が住んでいた、であろう世界——ここが異世界かどうかなんて、知る由もないが——でコンクリートの上で寝ているものなら、途端に天国へと行けるが、ここなら大丈夫だ。と現実から目を背ける。得たのは虚しさだけだった。

しかしそうでもしないと、自分が不安で押しつぶされそうなのだ。他にすることも無くなってしまったので、思い出に浸る。一秒ほどで終わった。

暇になってしまったので、睡眠をとることにした。眠気は無いが、目を瞑れば、寝られるだろう、そして、この状況が夢であることを願って、瞼を閉じた。

(……眠れない)

眠気、といったものが訪れない。羊が万単位になったのにだ。おそらく、先行き不安な所為で、眠れないのであると推測する。

本当にやる事が無くなってしまった。どうやってこの不安を除くすればいいのだろうかと思ひも、どうしようもなかった。

いままで、頭には、あの家に行く、という選択肢も浮かんではいなかったが、あそこに行ったらなにかある、という言いようも無い危険がある。野生の直感のような、感覚的な物だが。

なぜなら、こんな何もないところに家、ってどうみても不審すぎるからである。

まあ、それが杞憂だったらいいが、体に染み込んだ何かが警鐘を鳴らしていた。

幸い、お腹も減っておらず、体力も充実している。あの家に行くまで時間を増やせるだろう。しかし、八方塞がりなのは、何も変わっていないかった。

はあ、とため息を漏らす。

「お困りですか？」

突然、頭上から、鈴の音のような声が降ってきた。

一瞬、寂しさで作り上げたもう一人の自分——かと思ったが、すぐに否定する。

期待と不安の孕んだ目を彼女へと向ける。
そして次に襲ってきたのは、驚愕だった。

彼女は細身で、触れたらいまにも折れてしまいそうなほどだ。
表情には、まだ幼さが残り、表情は天使を彷彿とさせるような柔和な笑み。サファイアの瞳には暖かさがあり、どんな人であろうと、猜疑心を抱かせることはなく、緊張を解くことだろう。

真っ白な髪は短く切られ、肩くらいの長さ。

なぜかこの場所に似合わない、よくあるセーラー服を着ていることから、学生なのかもしれない、と思った。コスプレっていう可能性も無いことは無いだろうが。

紛れも無い美少女だが、それらすべてを意識から、別の衝撃へと転換させる威力を持った”もの”があった。

彼女には、翼が生えていた――。

色は純白で、羽からでてるのは、光の粒。粒子。はらはらと舞っている。

キラキラと、光を反射するソレは、神々しさを外在させていた。
それは、神話やファンタジーで登場する、……天使、と良く似ていた。

「あ、あ……」

開いた口が塞がらない、なんてことが、本当にあるのかと、常々疑問に思っていたかと言えば解らないが、どうやらその疑問はたった今不本意にも解消されてしまったようだ。

「どうされましたか？」

彼女は未だ微笑を携えたままだ。

（コスプレ、っていう設定だったらいいなあ、とか思ったけど……それはそれで問題がありそうだな）

常識の無い人かと思うが、一つの動作には品の良さが感じられた。
「もしもし」

彼女が首を傾げながら僕の眼前で手を振る。

すると、翼が意思を持ってして動かされているかのように、羽ばたく。すると、光輝く宝石のようで、雪のように白い粒子が、流れに逆らわず、周囲に散らばる。

僕は思わずそれを目で追ってしまふ。あまりにも美しく、心を奪われてしまった。

「あの、誰？ ……ですか？」

ようやく口を開く。初対面の、しかも女の子——翼付きの——と話すという緊張で、渴いた口はうまく滑ってはいけなかった。

「ああ、すみません」

そういつて彼女は慌てて僕に頭を下げた。

（あたふたしている姿もかわいいなあ）

そして、彼女は恭慎の表情を浮かべ、開口した。

「私は——天使です」

空気が死んだ。凍った。

残念ながら彼女には、冗談の気配が感じられなく、真剣だった。

「——はい？」

思わず聞き返してしまふ。

さぞや間抜けな顔が、彼女——いや、自称天使の、瞳に映ったことだろう。

「私は天使です」

「天使？」

「はい」

「コスプレ、とかじゃなくて？」

前言撤回するが、コスプレであることを切に望んだ。

「はい。本物です」

翼が優雅に、同色の粒子を軌跡に残し、はためいた。

「——！？」

認めるしかない、彼女は天使です。

言っていて、悲しくなったのはなぜだろう。今、夢の中にいると言われても驚かない自身が芽生えていた。

しかしそうになると、僕の好奇心が疼く。

「翼……触ってみてもいい？」

すると、彼女——天使は、ポツ、と頬を朱に染めた。

「あの、その……わ、私はいいですけど……よしっ、どうぞ」

天使は何か自分の中での葛藤の末、覚悟が決まったようで、決意の籠もった表情をしていた。翼を見るくらいで何の決意を？ と疑問に思ったが、自分の中で会議しても答えが出るわけでもなく、結構、疑問を無視することにした。

彼女は目の前に翼を差し出してきた。いまさらだが、かなり光栄なことをしているのではないだろうか、戦々恐々とするも、好奇心心には勝てなかった。

だって見れば見るほど、それは神々しい。

どうやら、ただの翼、というわけではなく、光の粒子が集まって象っているようだ。

触れてみると、柔らかなシルクのような感触が僕の手のひらに伝わる。太陽のような暖かさに包まれるような心地がした。

天使を見ると、「してやつたり！」といった顔をしている。なんだろう、天使のはずなのに悪魔に見えるのは気のだろうか。

「完了です」

「はい？」

柔らかくて気持ちいい。反射的に頭を埋めたくなる。これを布団に詰めたら気持ち良く寝られそうな気がした。

「天使の羽を触る、ということには意味があります」

少し天使は間を置いた。

なにやら嫌な予感がしたので、取りあえず翼から手を離す。あのフワフワは名残惜しいが仕方ない。背に腹は代えられないのだ。

「それは、契りをかわす、ということですよ」

「ちぎり？」

千切り？ 何かちぎるのだろうか。肉体とかだったら――……洒落にならないな、と身を固まらせた。

「はい、言うなれば、……結婚です」

ピシリ、という音が脳内で聞こえた気がした。この天使はいきなり、なんとという爆弾を投下してきたのだろうか。ギギギ、という錆び付いたブリキのような音を立てて、天使の透き通った瞳と視線を一致させる。

「……婚約的な意味で？」

「はい」

「僕と、君？」

天使を指差してしまいそうになり、慌てて握っていた三本の指を開く。

「はい」

笑みを携え、一言で切って捨てられた。

「まだ十八じゃあない……はず」

「大丈夫ですよ」

「なんで？」

もしかして天使様が僕の年齢を知っているのだろうか。

（それは光栄なこと……なのか？）

怒涛の急展開ラッシュすぎてついていけない。物語の大事な要素である起承転結の”転”が連続して起こっているみたいだ。いい加減”結”にして欲しい。

今日だけで、人生の驚きを半分くらい使ってしまった気がする。

「だって、……あなたは”……”のですから。どっちにしろ、法律なんて、関係ないですよね？」

天使は未だ微笑んで、その笑みには似合わない言葉を発した。

（……寒い）

まるで世界が死んでしまったかのように、寒い。隕石が地球に落ちて、氷河期にでも突入してしまったのだろうか。いや、その方

がまだ救いがある気がする。

降り注ぐ陽光は心までは届かず、温めてはくれないようだ。

理解ができない。荒唐無稽だ。さつきから、いきなりなんでも急展開すぎではないか。しかも、短い記憶の中でだが、今までに無いほどの急展開具合だ。

そして非情にも再び天使は同じ言葉を僕に叩きつけた。

「あなたは死にました」と。

沈黙が降り、その間、脳内で状況を整理し、吟味してゆく。

よく考えてみたら頷ける。

急速冷凍された脳みそが導き出した答えなのだが、さつきから、お腹が減らない。眠気がこない。これはいかに。そして、”そうだとしたら”、今の状態にも納得ができる。

アンサー。死んでいるから。

——と、理屈として、頭では呑み込めてはいた。

だが、あまり納得は出来ない——というより、したくない、という気持ちが大部分だ。

しかし、それ以上に生きているような感覚が今あった。

唾は飲み込めるし、日差しは暖かい。空は広くて、青いことが認識できる。生きている状態と何ら変わらないのだ。

「僕は死んだのか……？」

言葉に出してみる。それでもピンとこない。どうしても語尾にハテナが付いてしまう。

「否定しないんですか？ 普通、私の頭を疑ったり、自分の死を受け止められないと思うんですが」

「うん……驚いているし、否定して欲しい気持ちが大部分だけど」
ゴクリ、と唾液を飲み込む。

「お腹も減らないし、眠くもならない。それに、天使だっているんだから。そんなことがあったら、生前の世界の場合、今頃マスコミが押し寄せてきてると思うから」

「いえ……私は……天使というか……天使ではあるんですけど……」
「？」

これは口に出していないが、僕はさながらフランダースの犬の気分だ。

これかこんな美しい天使の導きで天国へ逝けるのだろうか、少し得したような気分でさえあった。それに、死んでしまったら無に帰すると考える”自分”には、僥倖と言って差し支えなかった。

……っていうか、死んだと言われてもこれじゃあ信じられないだろうな、と思う。信じられたのは、生前にはないものがあったからというのが大きい。むしろ、それが無ければ信じなかったかもしれない。だって、今だってしゃべることも出来るし、呼吸だってできる。生前と同じ空気を空気を吸っているかは解らないが。

「それに、僕は天国に行けるんだよね？　だったら、まあ、いいかな、と。不純かもしれないけど」

結婚とかのくだりの意味は分からないから無視しておいたが。

そして、どこか、生きることになった自分がいることも目をそらした。……死んでいるけど。この気持ちがどこから湧いてでるかは、今すぐには、おそらく分からない。

「いえ。あなたは天国には行きませんか？」

（——ん？）

生前、何か天使にとって悪いことをしたのだろうか？

残念ながら、思い出せなかった。

「じゃあ。地獄……か。天使に地獄に送ってもらうなんて、笑えるけど」

ははは、と笑いを零す。悪いことをしていたのなら、きちんとそれを受け止めるしかないのだろう。というか、その考えだとすべての生物が地獄に逝かなければならないとは思っけど。生物を殺すのが悪だとしたら。

「あなたは地獄にも天国にも行きませんか。そんなものはありませんから。あなたが行くのは『三途の川』です」

(……『三途の川』?)

一体それはどういうことだろうか。流石に、群馬県か千葉県に行くという線はないだろう。

三途の川から地獄か天国に行くってことなのだろうか。

いや、そうだとしたら先ほどの天使の言葉と矛盾するのではないのか。

そう困惑するのをよそに、まあ、と言って天使は、

「詳しいことは、あそこで話しましょう」

と、あの日本家屋を指差した。

何故か悪寒が、心中で沸き立っていた。

門の前に立つてしまった。

今の所は、なんの変哲もない家だ。

もし、日本の田舎へ行ったのなら、たくさん見ることが出来そうな感じだった。

縁側には庭があり、そこにある池は水面が陽光を反射し、光を放って、空間の美を演出していた。

天使が玄関を開ける。

すると横引きのドアは、ガラガラ、という音を立てて開いた。

どうぞ、と言って先に中に入った天使が僕を招いた。勝手知ったる他人の家だろうか。または、自分の家。もしくは、不法侵入。一番最後でないことを願う。そうだとしたら、どうせ死んだんだしと、嫌な開き直りをするしかないだろう。

おじゃましまーす、と小さな声でこわごわ、家へと入った。不法侵入ではない。玄関に入ったら、返事が無かったので、家に入りました、申し訳ありません戦法で行こう。と、言い訳を考えておく。入ってみても、普通の日本家屋で、別に変わったことなく、床は木で、玄関で靴を脱ぐのも。

ただ、この家にはいい匂い——花のような、仄かな匂いが充満し

ていた。この”家”の匂いだろうか。

「あの……天使さん」

と問うた。一世一代の覚悟、という程ではないが、結構な覚悟ですると天使は、はい？　と言って、身を翻した。

彼女の翼からは、光の粒子が演舞する。

一瞬で、辺りは穢れ無き空間へと変貌したような気がした。

だが、その粒子に引けを取らないほど、彼女は妖艶で美しい。陳腐な表現ではあるが、完成した絵画のようだと思った。

まさに天使と形容するのにぴったりだった。もしかしたら、天使をみて、それを元に神話をかいただろう人も、同じ気持ちだったのかもしれない。

彼女に——その光景に見とれていると、彼女の視線が突き刺さっていたので、僕は慌てて尋ねる。

「翼、邪魔ではないんですか？」

天使の翼は、彼女の背丈ほどあり、ずっと存在を強調していた。

「ああ、そうですね」と呟いて、すぐに天使は翼を消した。

翼は粒子となって、彼女へと吸い込まれてゆき、その威圧も同時に消え行く。

すると、天使は一人の女の子になった。

「あの」

今度は天使が声をあげた。

朱色に染められた頬は見ていて初々しさを感じさせる。少女と女性の魅力があり、思わず見とれてしまう。

すると、心臓が高鳴って、全身を熱くした。現金な心だな、と呆れるが、男なんて、そんなもんだ、と言い訳しておく。

「せっかく結婚したのですから……名前で呼んでいただけますか？」
そういえば先ほどから、天使、天使と、言っていた気がする。
(どんな名前なんだろう。ルシフェルとか？　それともガブリエル？)

結婚した？　まあ、それは聞こえなかったことにしよう。知らない

かったとはいえ、むりやり契りを結ばせてしまったので、少し罪悪感がある。どのみち、『三途の川』とやらに行けらしいから、すぐにこの契約は無効になってくれるだろう。

「私の名前は、難しい方の”みどり”という漢字と”あめ”で”翠雨”(すいう)と言います。旦那様」

日本語だった。

「よろしく願います。あと、結婚とかは——」

「翼に触ったので」

「いや、でも、やっぱりこういうのはお互いを知ってからで……」

「私に知らないことはありません。たぶん」

頑として聞き入れてくれなかった。

それに、もし彼女が人間だとしても、こんな美人さんに僕なんか釣り合わないことは明白だろう。特に今の僕が良くて、彼女がかわいそうだ。

彼女からしてみたら、翼を触った僕が言うセリフじゃないのだろうけれど。

というか、死の世界に結婚とかあるのだろうか。

それに、漢字のオンパレードだった。

(……誰だ。天使に、ミカエルとか厳つい名前つけたやつは)

何となく、日本的に普通の名前と解ると、どこか親近感を彼女に持てた。翼を仕舞ったことも一因にあげられるだろうが。

「そうなんだ。てつきり、聖書に載っているような名前かと思った」

「はい。翠雨ですよ。旦那様」

天使——翠雨さんは微笑んで言った。なぜかその笑みに黒い物が混じったような気がする。いや、気のせいだろう、と断じて、気にならなかったことを翠雨に聞く。

「あの、旦那様……って、いつ結婚したんでしょうか。僕達は」
今更ながら敬語を飾りつけた。

良く考えたら天使は、『神の遣い』と聞いたことがある。少し親近感が持てたとはいえ、一人間が気安く話しかけていいものじゃないのだから。階級にもよるだろうが、総じて天使とは生物のヒエラルキーにおいて、上位にたつものだろう。

「……そう、ですか」

天使は初めて顔を曇らせた。

そして、誤魔化すように、罪悪感を感じさせるほど無理やり笑顔になって言った。

「えっと、じゃあ私のことは『翠雨』もしくは、『マイハニー』や『翠雨たん』と呼んでください」

途中、吹き出しそうになるのを堪えるのに苦心した。

「えっと、……す、すす、翠雨」

天使の名前を呼び捨てで呼ぶなんて、なんて大きなことをしちゃったんだろうか。もしかしたら、殺される——とかではないだろうか。まあ流石に杞憂ではあるうが。

そこまで考えて気がついた。もう死んでいた。不思議なもので、それを忘れそうになる。それほどに、『生きている』感覚があるのだ。

すると、はい、と翠雨は柔らかに微笑んだ。そして、逡巡するよきな仕草を見せた後、

「旦那様。……旦那様の名前を覚えてもらえませんか？」
と言った。

喉に小骨が突き刺さったかのように、口をつぐんでしまう。

そして、途端に憂鬱な気分になる。今まで忘れていようとしたりとなのだから。……まったく。忘れたことだけ覚えていなんて、なんという皮肉なんだろうかと思った。もちろん翠雨に他意はないのだろうが、どうしても恨んでしまう。その彼女は返事が遅いこと

を疑問に思ったのであろうか、首を傾げていた。

（答えないとだめなんだろうなあ……）

一応知り合ったのだ。いずれとおる道だとは思っていたのだが、やはりいざとなると誤魔化しにくくなった。

（仕方ない、か）

少しの覚悟を決め、唇を動かす。

僕は。

僕の名前は――。

「主ら。そんなところでイチャイチャせずに、早く入ってきたらどうじゃ。ワシは待つのはもう疲れたのじゃ」

その覚悟を遮ったのは、奥の部屋から聞こえてくる高い声をした幼い女の子の声だった。

そして、思わず声の主に感謝したのだった。

……幼女。

一言で言えば、それに尽きた。

その幼女はふてぶてしく、座椅子に体を傾け、僕達に視線を向けていた。それは、掛け間違えたボタンのように、どこか見た目と違和感を生む。

彼女の墨色の髪は、椅子を覆うほど長い。

体軀は小さくて、普通に幼女。

彼女は小豆色の着物を纏い、きちんと着こなしているようだ。

その着物は着崩され、真っ白な肌と鎖骨が脳裏に焼き付く。

とりあえず、畳の上に座布団が置いてあったので、翠雨がそこに腰掛けたのを見て、空いた一つに正座する。テーブルを挟んで、幼女と視線が交わったかと思うと、ポンと手を叩き、彼女の横にあつ

たらしいお盆を取り出した。

その上には急須と、湯飲みが三つあり、板についた所作でお茶を注ぎ、各々の前に並べる。一つ礼をして受け取り、それを口に含むと、ほうじ茶の心地よい香りがして、少しだけ平静を得た。

三者が湯飲みを置く音がすると、少女が口を開いた。

「ほれ、なんの用じゃ。早く用件を申せ」

高く年相応の声から紡ぎだされるけったいな言葉は、やはり彼女の風貌とは噛み合わない。

ふと、横の天使を見ると、肩を震わせていた。

この少女を見て笑いそうになっているのだろうか。喋り方と見た目が一致していないから。どうすればいいか解らなかったのも、部外者である自分は、とりあえず黙っておこう、と決める。

「おい、ロリババア。人がいい雰囲気な時に邪魔をしないでください。空気を読んでください。っていうか、イチヤイチヤは古すぎますよ……」

先ほどの言葉遣いとは黒白。^{「くろはく」}

物凄い”ドス”が効いていた。

本当に先程までの天使——翠雨かと疑うほどだ。

(……怖かった……)

自分の口から、「ひっ！」という声が洩れたことは、ほとんど空っぽな黒歴史フォルダーから消し去りたい。

良かった。この二人は知り合いなようだ。不法侵入で訴えられることは回避し、こっそり安堵するのだった。

「なんじゃ。そうじゃったのかの？ くくく」

少女は愉快そうに口元を歪めた。

この少女のさっきの発言は、確信犯のようだ。個人的にはかなり助かったので文句は言わないでおこう。まあ、どちらにしても通る道ではあるうが。

それより、誰だこの少女。と思った。閻魔様とかは——……笑えない冗談ではある。否定できないところが辛かった。

天使と対等に話せるくらいなのだ。神様とか悪魔がでてきても驚かない自信が……ないな。そんなことを考えている間にも、二人の口舌戦は続いていた。

「これだから引きこもりは駄目なんです。どうせ、何日も日の光を浴びてないでしょう」

「別に流行に乗れなくとも、生きていくのに支障はないじやろう。それに、外にでるのは面倒じゃ」

「うわぁ……」

「——あ、あの……」

今まで沈黙を貫いていたが、意を決して声を上げる。

このままじゃあ話が進まない、そんな気がしたからだ。虎と竜の争い——もしかしたら、それよりたちが悪い争い——に割って入るような気分だったが、このまま平行線を辿るよりはいいだろう。

「そうじゃったそうじゃった。お主を忘れておったわ、で、なんじや？」

幼女は不適に笑う。

だが、それ反して眼光は鋭く光っていた。獲物を狙う猛獣のようだ。

「あ、と、その……」

会話を遮れたのは良かったものの、結局どこから話せばいいのかわからず、空に言葉が零れるだけになってしまふ。そこで、翠雨に目でヘルプを送ってみる。すると、彼女は、こくり、と頷いた。

「とりあえず、自己紹介しましょう。まずは、ロリババアからですると、幼女は頷き、自分の薄い胸に、手をおき、堂々と宣言した。

「ワシは魔術師じゃ」
と。

「魔術師……ですか……？」

「なんじゃ。もっと驚くのかと思ったのじゃが」

と、残念そうに幼女は口を尖らせて呟く。神様が来ると思ってい

たからまだ堪えられただけで、内心は驚きで溢れかえっている。なんとまあ、ファンタジーな世界に来てしまったものだ、と少年は思った。

普通なら信じないところだろうが、先の『翼』により、『信じる』というウエイトに傾いている。

「まあ、天使がいたら、魔術師でも魔法使いがいても可笑しくないかと思ったので」

普通、自分より見た目年下に敬語をつかうのは、なんとなく違和感があるものだ。

しかし、この幼女の出すオーラ——雰囲気は、それを感じさせない。

だから、彼女に対して敬語を使うのに違和感はなかった。

「ほうほう。一つだけ言っておくとなのじゃが——」

そう言って幼女は言葉を切る。

間を空けて余韻に興じるのが趣味なのかどうかは解らないが、彼女はお茶を一啜りした。

「『魔法使い』と『魔術師』は似ているようで、まったく違うのじゃ」

「はあ……」

正直言って、あまり納得ができない。だからどうしても曖昧な返事をしてしまう。

魔法使いも魔術師もゲームみたいに、MPとか魔力とかを使って、魔法ないし魔術を使うものではないのだろうか。

すると、少年が疑問を浮かべたのが解ったのか、幼女は言葉を足した。

「……そうじゃのう。『魔術』は有から有で『魔法使い』は無から有じゃ。と言ったら解るかの？」

少年は首を少し捻った。

「はあ……。あなたの話は総じて解りにくくて、抽象的なんですよ。いきなり本質から言うより、単語の意味を一つずつ解説から言わな

いと」

と、翠雨が割って入った。

サファイアのような色をした美しい目は少女に向けられている。

この二人は犬猿の仲なのだろうか。……と言っても、翠雨が一方的に噛みついていてるっていう感じを受ける。二人の関係がイマイチ掴めない。この家に二人暮らしをしているのだろうか。他に家は無い訳で、いくら天使や魔術師だからといって、家が無いのは辛いだろう。死んでいるのでお腹は減らないから、こんな何も無い世界でも生きていけそうな気もするが。

「えっと……ですね。魔術は科学で、魔法は奇跡なんです。まず、それを覚えておいてください」

翠雨の言葉を復唱する。

彼女は雰囲気を出す為なのか、どこからか赤色のフレームをした眼鏡をかけていた。

表情が習う姿勢になったのを確認した翠雨は、「むー」と唸っていた。いい例えでも考えているのだろうか。しかし、そこに少女が口を挟んだ。

「そうじゃのう。まず魔術には必ず、と言っていい条件があるのじゃ。正確には公式……と言ったところか。科学と一緒にの？ ボイシャルルの法則などを聞いたことがあるじゃろう？ それと同じじゃ」

「公式？ それは、魔方陣とか詠唱のことですか？」

すると、くくく、と少女は笑いを押し殺そうとしたような声を洩らす。すぐに殺しきれなくなったようで、すぐに腹を押さえ笑い出した。

む、と少年は不快感をあらわにして眉をひそめる。

「あー。おかしい。腹が抜けるわ」

目には涙が溜まっている。そこへ割って入る者が居た。翠雨だ。

「旦那様を笑うなんて不届きですね。……まあ、それはさておいておきます。とりあえず、私が魔法、あなたが魔術を見せて差し上げ

れば良いかと。百聞は一見にしかずです」

「よいとは思うんじゃないが、何をするんじゃない？」

「そうですね。私が魔法を見せて、貴方が魔術を見せるのがいいと思います。では、さっそく。旦那様。見ててくださいね」

「う、うん」

翠雨は立ち上がると、右腕を横に突き出した。双眸は真剣そのもので、思わず少年は唾液を飲み込んだ。

そして、途端に空気が張り詰めたものと化する。

さらに翠雨は、先ほどしまった翼を出現させた。

すると、翠雨の意志に呼応するかのように、何処かからか、翼と似た粒子が翠雨の手の平に収束する。翼の大きさは自由に操れるのか、先ほど見たのより幾ばくか小さく、少し背から飛び出る程度だ。集まっていくな粒子は、形へと変貌を遂げる。

それは槍。

長さは翠雨と同じくらいで、矢のような形をしている。少し動かすたびに、粉雪のように粒子がその奇跡を追いついては、はかなく消えて行く。そこからにじみでたオーラの奔流の威圧感に、飲まれそうになる。

物騒な武器であるにもかかわらず、儂げな少女である翠雨が持っているというその光景は、あまりに幻想的と感じる。

翠雨は、翼と槍を、空中に染み込ませるように消し、座布団に正座した。

そして、今更ながら自分が住んでいたであろう場所とは別の所にいるんだなあ、と認識を新たにするのだった。

「どうです？」

「凄い……これが、魔法？」

はい、と翠雨は頷いた。

「さて。じゃあ、ワシがやってやろうぞ」

魔術師は立ち上がり、自分の着物の裾から何かを取り出した。そして、なぜか誇らしげに、それを掲げた。

——マツチ棒。

今の所は、ファンタジーでありがちな、ペンタグラムをモチーフとした魔方阵らしき物は見当たらない。

そして彼女は、まるで、タネが無いことを確認させるマジシャンのようにそれを差し出してきた。彼女が動く一つ一つの仕草は洗練されていて、その無駄のなさには一種の美しさをも感じさせる。

とりあえず、くるくるとマツチ棒を回してみ、特に何もなかった。なので幼女に返した。

「不思議そうな顔じゃのう。くくく。まあ無理もあるまい。今から魔術を見せてやるんじゃ。しかと見ておくのじゃぞ」

幼女は不敵な笑みを絶やさない。

そのまま、彼女はマツチ棒を指で上に弾いた。初速が無くなり、自由落下してゆく。

——ポン、とシャボン玉が破裂するような音がした。

すると、”ひとりで”マツチ棒から火が点り、さらには、”渦を巻き”、野球ボールほどの、火球へと形を成した。それを魔術師は満足そうに一瞥すると、ケーキのろうそくを吹き消すように吹くすると、火球は揺れると、何も無かったかのようにその姿を消し去った。

息を呑む。常識が再び否定され、思考が冷凍される。

「どうじゃ？」と聞いてくる声が、耳を潜^くり抜けた。

幼女は誇らしげに、ほとんど無い胸を張っている。

興奮していた。

幻想に憧れるも、それを否定する、年を重ねることに積み重なってきた現実という壁が破壊される瞬間。好奇心が全身を焦がし、不足した酸素を吸い込んだことにより肩が上がる。

どうして。どうやって。

二人に聞きたいことが募って、喉元で交通渋滞を起こした。

「まあ、とりあえず聞きたいことがあるにじやろうが、実演したところじゃし、まずは『魔術』について、理論的に教えるかの」

と、魔術師は椅子に持たれ、お茶を飲んだ。

「……解ったかの？ 『魔術』は。そして、お主の言っておった魔法陣とやらはあったかの？」

「無い……です」

しかし、感じたことは、どちらも神秘的な物で無いのかと思った。どちらとも科学という分野から外れているのではないだろうか、と。「まずは根本的なところから話そうかの。ワシと翠雨の違いはなんじゃ？」

二人の起こしたことを、思い出してみる。

最初に翠雨がしたのは、どこから白い粒子をだし、槍にした。

一方、魔術師の方は、マツチ棒を取り出し――。

「もしかして、粒子と、マツチ棒？」

すると満足そうに彼女は頷いた。どうやら当たりのようだ。

「つまり魔術には”道具”が必要なのに対して、魔法は”道具”が要らないのじゃよ。『粒子』を翠雨は生み出した。しかし、ワシはその実、マツチ棒を生み出してはおらぬのじゃ。一連の動作すべて”お主には”見えてはおらぬじやろうが、実は、そのすべてがエネルギー保存則に乗っ取っておる。その考えはある意味間違いでもあるが、そう理解しておけば楽じやろうて」

そう言えば、翠雨のやりは、無から生み出した、ということは、その空間にあったはずの物質――つまり空気――は何処に行ったのだろうか。まあ、今は関係ないか。

「つまりは、『科学』とは『魔術』と同質の物、ということじゃ」「？」

「ワシは、さきほどエネルギー保存則に基づいていると言った。つまり、これは『科学』の法則じやろう？」

マッチを投げた時に起きた火は、まだ納得が出来る。偶然摩擦によつてとかで。

だが、それが球体になり、さらには渦を巻くなんて、想像もつかない。

その動作を魔方陣やらなんやらで解析不可能な能力を使ったのではないのだろうかと思うのだ。

「まあ、ここは概念の問題なのじゃがな。例えば、なぜマッチに火が点いたのかはまだ納得がいくじやろう？ ……この言い方は嫌いなんじゃないがな。そう、科学的にじゃ」

頷く。

構成する物質の力を用いて火を、例えばマッチなら摩擦とそのマッチを作る物質——確か、赤リンだったか——を使つて起こしたつてことは、科学的に証明されているはずだ。

「じゃあ、なぜマッチに摩擦を起こしたら火が起こることが、『魔術』とは言えないのじゃ？ 渦を巻くための科学的な法則が、なぜ無いと断ずることが出来るのじゃ？」

「だつて……」

僕は言葉を切らざるをえなくなる。

確かに、それも根源まで辿つていったのなら、説明がつかなくなつてしまう。

”なぜ”という言葉が積み重なると。

”なぜ”、マッチは摩擦で火が起こるのか。

答え。それは、構成する物質がそういう作りをしているから。

じゃあ、なぜそういう作りをしているのか。

そついう構造になっているから。

それはなぜ。

それは、元素の性質だから。

なぜ、元素はそついう性質を持っているのか。

それは——？

人間は、完全に科学の法則を解き明かした訳では無い。ただ、自

分達が”見える”ところまでを『科学的根拠』としてあげているだけなのだ。

「そういうことじゃ。”目に見えない科学”が『魔術』で、”目に見える魔術”が『科学』なのじゃ。例えば、昔にそれもマツチという概念が無い時代に、マツチを持っていた時じゃ。そのマツチに火が点いたところを見て彼らはどう思うかの？『科学』と思うのか、それとも……魔術と、思うのか。くくく」

——確かに。

人間は自分の目で、頭で理解できないことには恐れ、”魔”という文字をつける。

だが、それが理解されうる物ならば、見える”魔術”それは”科学”へと昇華する。

だから、彼女が使った魔術も、何かの原理、公式が存在しうる科学ということか。

先ほどまで考えていた、あり得ないことを引き起こす、のではなく、元々世界に決められた見えない——例えば、コウモリの超音波のような人の領域で認識できない——という”あり得ること”を引き起こすのが『魔術』と解釈できるだろう。

「じゃ、じゃあ『魔法』は何なんですか？」

すると、魔術師は満足げに微笑んだ。

この質問を待っていましたと言わんばかりに。

「言ったであろう。魔術は有から有を生み出すことに対し、魔法は無から有を生み出すのじゃ」

「それは解ってるんですけど、『魔術』のような法則があるんですか？」

「じゃから、あるといえば『無から有』じゃ」

覚えの悪い生徒に困る教師みたいに、魔術師は眉を顰めた。

「ちよつと黙ってくださいロリババア。魔法は私たちの領分です。

魔術師は魔術だけを言っていればいいんですよ。……もつとも、あ

あなたの魔術はもう魔法の域ですが」

ここぞと言わんばかりに、天使——翠雨が話に加わる。

するとここに来て初めて幼女が笑みを崩し、眉を八の字に歪めた。説明好きなのかもしれない。この幼女、と自分勝手に推測しておく。生前は教師とか、学者とかだったのだろうか。説明好き、と言えば、そんなイメージがある。

「旦那様。『魔術』は何かを用いてそれを変換することです。——例えば、炭素が酸素と結合して二酸化炭素になるように」

けれど、と天使は間を置いた。

「『魔法』は違います。例えるならば、炭素と酸素を使わずに、科学的な法則を無視して、何も無いところから二酸化炭素を出現させるのが魔法です。もしかしたら人間の心、といったものも魔法なのかもしれません」

「ん？　じゃあさっきの——翠雨の槍は、科学的な法則を無視し、出したってこと？」

「はい。こちら辺は矛盾の概念が入ってきて難しいので飛ばしますが、そうですね、私の槍は無から有ですから。なぜと聞かれても答えにくいのが魔法の特長ともいえるかもしれません」

「そっか、説明ありがとう。すごく助かった」

「夫をかいがいしく支える妻……ふふっ」

若干引いていると、拗ねたように、魔術師が、「わしは？」と言ってくるので、ありがとうございます、と感謝をこめ、お礼しておく。

それにしても、先ほどから幼女、幼女と連呼しているのだが、これだと社会的——あの世に”社会”というものが形成されているのかどうかは解らないが——に、というか人としてアウトな幼女愛好者——ロリコンだと僕が勘違いされてしまいそうなので、「あなたの名前は？」と尋ねようとした僕だったが、人に名前を聞くときは自分から名乗るのじゃ、とか言ってきそうなので、その言葉は唾液と一緒に飲み込んだ。

「で、主の名前は？」

僕の心を読み取る魔術をしたのか、もしくは僕の顔にでていたか、あるいは偶然か僕に推し量ることは出来ないが、彼女は僕に尋ねてくれた。渋々上唇を上げようとする、と、

「他人に聞くとときは自分から言うのじゃないのですか。何百年も生きてきて、それさえ解らないとは流石ですね。尊敬いたします」

と、翠雨がそれを遮った。

彼女の敬語は、僕と話するとき以外——というか少女と話すときに常に棘を入っている気がするのは気のせいだろうか。

(……天使って、もっと神聖な感じではなかったっけ)

少し、理想の天使像が崩れたのだった。

少女はそれに気を悪くした様子もなく、

「まあ、そうじゃの。ワシの名はクリスティーナ・シュバルツ・ラスクじゃ」

『ダウト』

僕と翠雨の言葉が見事に被さった。

翠雨は、「さすが夫婦ですね、ツツコミも一心同体。……一心同体ってなんとなくエロいですね」と惚けていたので、取りあえず意識の外へと棄却しておこうと判断。

「ばれたか。くくく。……ワシはアリスじゃ」

よろしくの、とアリスは微笑んだ。

明らかに日本人な風貌の癖に『アリス』。

偽名かと疑ったが、翠雨の反応は無し。どうやら本名のようだ。

「よろしくお願いします。アリスさん」

というか、翠雨に”ロリババア”とか言われても歯牙にもかけていない。懐が広いのだろうか。それにしても、彼女の年齢はいくつだろう。見た目は十歳以上だが、時折、雰囲気は老獪さが混じっている気がする。喋り方の所為かもしれないが。

まあ、実際のところ何歳なんだろう。もしかしたら、早く成熟し、そんなしゃべり方になってしまったのかもしれないからだ。

「っていうか、アリスさんって何歳なんですか？」

と、そんな言葉が口をついてでていた。

普通女性に年齢を聞くのは失礼とされるのだが、どうしても気になつてしまっていたのだ。

「むう。……お主はおなごに年齢を尋ねるのかの」

アリスさんは不機嫌そうに口を尖らせた。

そんな様子が子供のそれで可愛い。やはり、十代前半だろうか？

すみません、と謝る。すると少し気分を直したのか、アリスは答えた。

「まあよいが。……だいたい百歳くらいかのう」

えっ、と口から零れそうなのを慌てて下唇で掬った。

……ははは。笑える冗談ですね、と思った。その証拠に、アリスの目は、泳ぎに泳ぎ回っている。

「嘘をつかないでください」

と、此处で翠雨が間に入った。宝石のような瞳で翠雨がアリスを覗き込む。

流石にそれはありえないだろう、と、ツツコミを入れてくれるのだろうか。基本的に登場シーンから今まで、ボケばかりだった翠雨が、ツツコミに回ってくれるとは、一種の感動さえも覚えるのだ。さすがに、百歳とかにしては見た目が年齢に比例してなさすぎるじゃあないか。その年齢特有の顔の皺なんて一つも無く、あるのは瑞々しい肌があるだけだ。

「年齢を偽装しても駄目ですよ。ロリババア。その五倍くらいでしただけ」

百掛ける五は、っと。

あれ、千割る二と一緒だ。

「マジな話ですか」

その問いに、アリスさんでなく、翠雨が答える。

「はい。このロリババアは私より長生きですよ。っていうか、この

世界、というかあの世、とも呼ばれる場所では普通ですよ。この見た目ロリは」

……合法ロリ。そんな言葉が脳内をよぎった僕はもう駄目かもしれない。そして、なんと便利なんだ死後の世界。

死んでいるのに疲れるってどうなんだろう。ずっと驚かされっぱなしだ。

どうやら、本当にアリス”さん”で正解だったようだ。

「ワシの話はもうよい。今度は主の番じゃ」

アリスさんは不機嫌を周囲に散布して、僕に尋ねた。

……番？

……ああ。名前かあ。

彼女にとって、何気ない一言だったのだろう。けれど、驚きによる好奇心は消沈し、憂鬱だけが脳内を塗りたっているような気がした。

これは言いたく無かったけど、言うしかないのか。いずれにせよ通る道だとは思っていたが……、ままならない。

そう、僕の名前。

僕の名前は――。

「僕の名前は……ありません。つまり、記憶がないんです」

沈黙。

誰もが黙っていて、開口しない。

呆れられたのだろうか。気味悪がられているのだろうか。どうなのかなんて、解りはしない。

そう、生前の記憶が無い。

正確に言えば、自身の歴史は、あの森から始まって、ココに来て、翠雨とアリスとの邂逅。

過去というにはあまりにも少ないそれは、たったそれだけに凝縮されている。

だから自分が何者か解りはしないし、さらにはまだ自分の顔さえも、思い出せはしない。気味が悪い。勝手に知らない人の体に移り移って動かしているみたいだ。

生活する方法などは記憶にあっても、思い出は無い。まるでそれだけ根こそぎ奪われたかのように、ぽっかりと穴が開いているのだ。

「……そうかの」

重たい沈黙の中、アリスはそう呟いた。機械から発声されたように、込められた感情を推測不可能だった。同様の無表情からは何も

うかがい知ることが出来ない。

隣にいる翠雨は、あふれくる何かを我慢しているようにも見えた。物音一つしない空間がこれほどまでに恐ろしいなんて、思いも寄らなかった。沈黙が肩にのし掛かって、少年の心臓を圧迫しているため、心拍がやけに速い。

「じゃあ——」

間に挟むのは余韻。間。この間が怖くて、恐ろしくて堪らない。今にも死刑宣告を受ける罪人のような心地がする。緊張して胃に穴が蜂の巣くらい開きそうだ。

「名前を付けねばのう」

アリスさんはさも当たり前のように言った。

一瞬何を言っているのか解らなかった。予想していた言葉が過ぎる。

『嘘だ』『怪しい』。だが、違った。

そして理解した瞬間、僕に乗っていた重たいものが軽くなってゆくのが分かる。

アリスは、あざけるわけでもなく、ありえないと笑うのでもなく、ましてや同情するわけでもなかったのだ。

「……笑わないんですか」

「当たり前じゃ。それに——」

爆発しない地雷を踏んで確認することく、自分の安心を確認するための言葉。

吐き出した、一文字一文字は、不安で塗りつぶされた心中を、氷が熱によってだんだんと溶かされていくかのように、ゆっくりと希望を安堵へと変えてゆく。

「名前が無ければなんと呼べばいいんじゃない。ワシにお主を名無しさん、と呼べとでも言うのかの？」

アリスさんは微笑む。

その笑みには優しさの内包が感じられた。赤ん坊が無意識に感じ取る、まるで子宮にいるような安心感があった。

邪気の無いそれは、いつそう心に安らぎを供給する。

だが、その顔に少し翳りが差していたような、そんな気もしていた。

「……そうです。ロリババアの言うことに従うのは癪ですが。どうであろうと、旦那様は私の夫ですから」

それに、賛同して、翠雨が毒と甘味を同時に吐いた。照れ隠しのように、毒は、アリスさんに、甘味は僕に。

彼女も、先ほどの表情は消え去り、何か振り切ったような笑顔をしていた。

心に陽光が差し込むのを『ナナシ』は確かに感じて、笑ったのだ。

「第一回！ 旦那様の名前を考えよう大会！ 『旦那様は翠雨の婿

——幸せの家庭を築く過程だ——！』」

いえーい、と元気な声が横から聞こえる。掲げられた両腕から、雪のような白い肌が見える。

その声の主は幼女——アリスだった。

行動からも、いまだこの人が五百歳だとは信じられない。

今どきの十歳でもこんな子供らしいことをする子供はいないと、

『ナナシ』は思う。

「じゃあ司会の名無しさんです」

「どーも」

それに『ナナシ』は軽く挨拶する。

こう堂々と言われると、なんというか照れる。自分で決める、というのもアリだが、自分で決めた名前と呼ばれるのはなんとなく恥ずかしい、ということ、誰か他の人に決めて欲しいという『ナナシ』の発言でこうなった訳である。

「はい！」

アリスさんが下ろしていた手をビシッと宙に高々と上げた。

ほんとに五百歳なのか、小一時間議論してみたいと思う。

「どーぞ。却下です」

翠雨が聞かずに切って捨てた。しかし、アリスはそれに意も介さない。

「ワシはジェノサイドがいいんじゃない！」

殺戮って名前は有り得ない。その名前を付けられてしまったら、道行く人々に指を指されそうな気がする。「うわー、あの人ジェノサイドっていうんだよーカッコいいー（笑）」みたいな感じで。

そして、五百年生きてきてそのセンスはどうなんだろう。何年も生きてきたなら、そこら辺も成熟するものではないのだろうか。

『ナナシ』は、早くも重い息と一緒に、拒否を吐いた。

取り敢えず、そんな恥ずかしい名前を背負って生きて（？）行くことは出来ないのだ。

「はい」

と、翠雨が手をあげた。

『ナナシ』は発言を促す。翠雨のネーミングセンスは、まともであって欲しいという期待をこめつつ。

「ジェノサイド@翠雨は俺の嫁」

期待とは、往々にして裏切られるものなのだ。

せめて、ジェノサイドから離れていただけると、この上なく嬉しいと提案する。

「もちろん却下」

いい案が出てくる気がしてこない。いつそのこと自分で決めた方が良かったと今更ながら後悔する『ナナシ』だった。

「まあ、こちらへんは前座じゃ。ワシの案はのう、気高く、そして凛々しく、また——」

「早く言ってください」

大いに同意だった。

「まあそう急くな。時間はたっぷりあるのじゃ」

「早く言え。ロリババ」

アリスさんには呼吸をするように暴言を浴びせるなあ、とちよつと感心してしまうのだった。

「これはどうじゃ、”のび太”」

アリスさんは誇らしげに胸を反った。

なぜそんなに自信満々なんだ。あれか、そんなに駄目人間に見えるのかアリスさんには。はは……（遠い物を見つめるような目）。

「もちろん却下ですが。何でそんな、世界が終わったような顔をしてるんですかアリスさん……そして誰か真面目に考えてください。もし無かったら、自分で考えるので」

はあ、とため息が零れた。一向に決まる気配がしない。せめて決まらなくても良い。ジェノサイドよりは。

「そうじゃのう。じゃあこれでどうじゃ。主の名前は”シン”——良いかの？」

おお、と思わず感嘆の声を漏らす。

なかなか良さげな名前だ。

それにしても、人に名前を付けてもらうのは、何とも言えない気分だ。恥ずかしいような嬉しいような。新しい飼い主に飼われる動物もこんな気分を味わっているのだろうか。そうだったら生まれ変わって動物になるのも悪くはないかもしれない。

翠雨の方を同意を求めるように見る。すると彼女は何か思うところでもあるのか、複雑そうに顔をしかめていた。天使仲間にも、同じ名前の一位がいるのだろうか。

「翠雨？」

ナナシが声をかけると、翠雨は目が覚めたかのように、顔を上げた。

「——っ！ すみません旦那様、ちょっと考え事をしていました。」

——私はいいいと思いますよ、”シン”が。とつても」

翠雨が申し訳なさそうな表情を浮かべながら言った。

と言うわけで全員の意見が統一されたので、『ナナシ』の名前は『シン』で決定した。

「……で、主は何を聞きたいのじゃ？」

シンはこの世界のことを何も知らなかった。

ということ、何でも知っていそうな、アリスに質問したわけである。正直、翠雨に最初は頼もうかと思ったが、「シン様、グヘヘ」と、なにやらニヤニヤしていて近寄りずらかったので変更した。

「あの、ここって何処ですか？」

これが、一番聞きたかったことだ。

自分が今生きている——死んでいるらしいけれど——場所は何処ってことだ。

「むむむ。そうじゃのう……。あちらでは”あの世”じゃがこちらではあちらが”あの世”じゃしのう……。」

ふむふむ、と年相応——といったらかなり語弊があるが、見た目幼女なご老人は年相応の振る舞いを見せる。

「じゃあこの名前、とか無いんですか？」

「うむ。それはあるぞ。名前は『三途の川』じゃ。誰が命名したのかはワシの知るところではないがのう」

そう言えば、少ない記憶の系を辿ってみると、翠雨と初めて会った時に『三途の川』とか言っていたような気がする。それを思い出して、シンは頷いた。

「……まったく。歳ばかりとつて、役に立たないですね。やれやれ」

と翠雨。

そう言えば翠雨は何歳だつて聞く勇氣はシンには無い。自分から進んで、地雷を踏みにゆく度胸も覺悟もなどないのだ。

「まあ、とにかくここは『三途の川』じゃ。おっけー？」

年にそぐわない仕草だが、見た目的にはぴったりだった。

「はい」

とシンが返す。翠雨は、興味がなさそうにスルーしていた。

「他に聞きたいところはあるか？」

なぜ、シンが翠雨と結婚したことになって、そして翠雨が巻きついた左腕に彼女のの胸から伝わる女の子特有の弾力が本当にマズいとか気になることは山のようにあるが、そこは鋼の（？）理性が頑張ってくれることに期待しておくとして。理性ふぁいとー。

「僕は死んだのなら、僕の意識とか消えないんですか？」

僕が死んだのなら、それは生まれ変わって、輪廻の輪に云々。……

のはず。まあ、これは宗教による違いがあるのだろうが。ちなみに、シンとすれば綺麗に無になると思っていたのだが、三途の川というこの世界のお陰で認識を新たにしたわけである。

とにかく、詳しいことは知らない。そして翠雨は耳に吐息を当てる止めなさい。うわー、いい匂いだなあ。心臓がバクバクと暴れ馬のように跳ねているのが解る。

……畜生、もう直ぐ、理性が本能に淘汰されそうだ。

「そうじゃの。意識は消えないのう。ただ魂だけが三途の川にくるのじゃ。で、この三途の川で死んだら、生前——つまり、お主が元居た世界と三途の川での記憶は消え、新しい魂になって新しい肉体をあちらで得るということになっておる」

つまりは、この世界で死んだら、本当に死んでしまつてことか。と言つても、再びこの世界のように別世界に行く可能性もある。まあ、それは死んでみないと解らないだろうが。

『僕』——つまり、シンと言う個は消えて、本当の死に至るのだろっ。

左腕の重みが消えた。理性おつかれ、是非とも、褒め称えたい。そして、本能さん残念でした。

「歳とかはとるんですか？」

すると、アリスさんは呆れたような表情で溜め息をついた。

「主には、翠雨やワシが歳をとっているように見えるかの？」

「あはは」

すさまじい納得力だ。此処に来て、一番納得できたことな気がする。

「……で。僕はこれからどうしたらいいか解りませんか？」

語尾にあはは、と付けてシンは誤魔化すように笑った。

どうすればいいのか、人に委ねるのは駄目だし、情けないとは思っう。だが、『僕』はさっき生まれたばかりみたいなの、赤ちゃんのような存在だから多めに見てくれてもいいだろう。頼る相手がいないのだ。いたとしても、覚えてないのだから。まあでも、ばつが悪いのは否定しない。

「そうじゃの。普通なら閻魔の所へ行くんじゃないかの。たぶん主はイレギュラーじゃの。だから記憶も無いのじゃろっ。そうじゃの

——
「ん？」

思わずアリスさんの言葉を遮ってしまった。なぜなら、ふと疑問が浮かびあがったからだ。

「どうしたのじゃ？」

アリスは首を傾げ、シンに問う。

「いや、思っただんですけど、話を聞く限り、『三途の川』には僕達以外の人が居るんですね。だったら、その人達は？」

そう。死ぬ人なんてそれこそ星の数程たくさん居るはずだ。さらには人だけでなく動物も。

なのに三人しかいない。こはいかに。

「えいつ」

「――ぐふっ！」

嫌な浮遊感と共に、シンの体が右横に飛んだ。別に、彼が何かした訳ではない。

何故なのか理由を聞きたかったら、突撃した翠雨に聞いていただけると、大変助かる。

いままで静かだった翠雨がシンに横からたいあたりをして、彼を押し倒した。地味に背中が痛い。

そのまま、翠雨はシンの上へとマウントポジションをとる。

シンのお腹から翠雨の暖かさが押し寄せる。やーわーらーかい。……そろそろ理性が限界だ。女の子特有の柔らかな匂いがシンの鼻腔を刺激して仕方がないのだ。

翠雨はふふふ、と笑みを零してシンの顔に自分のソレを触れ合うか触れあわないかの距離で接近させる。かかっている吐息がやけにくすぐったい。

彼女の唇は健康的なピンクで彩られ、妖艶さを感じさせた。

彼女の腕はシンの背中へとまわされ、逃げられないようにホールド。

うーわーたすけてー（棒読み）。

そして、理性の堤防が遂に、決壊するギリギリのことだった。

「お主、真面目に話を聞く気があるのかのう」

僕に降りかかったのは、アリスさんの呆れたような声。ナイスグッドバッドタイミング。

「す、すみません！」

無理矢理上体を起こす。

「きゃっ！」という声が聞こえたような気がした。

……気がしたのだ。世の中には気にしていたら進まない出来事がたくさんと待ち受けているのだ（悟りを開いたような表情で）。一応、心の中で謝っておこう。

翠雨は猿のようにシンの首にしがみ付いて離れない。

まあ、軽いからいいけど。

「ふむ。で、その答えじゃがのう——ここが、特別なんじゃ。三途とアチラの世界との中間点——狭間とでもいったところかの。そう言うしかないのじゃ。すまんの」

あれ、今更だが、この魔術師はわりと常識人っぽいようだ。

天使に比べるすいとだが、と、失礼な評価をシンは下し、

「いえ、全然気にしてません」

「そうか。で、主がこれからどうするかじゃがのう。——ホレ少しちこうよれ」

シンはノソノソと這って向かう。

首がミシミシと音をたてているが気にはしないことにしていた。

アリスは右手を前にだし、シンのおでこに手を添える。

彼女の冷たい手は、僕の熱された頭を冷やしてくれるようで、心地よかった。

少し時間がたった後、

「やはり、そうじゃったか」

「やはり……とは？」

意識せずとも顔がこわばったのがわかる。何か病気でもあるのだろうか。アリスはあまり表情に変化がないため、シンには判断がつきにくかった。

「そうじゃの、何故か主の記憶は散らばっておる。三途の川の何処かに……じゃがの」

「そうなんですか!？」

「うむ。いくらなんでも、全部の記憶が綺麗に無くなるなど、不思議すぎるからのう。これで納得じゃ」

最後あたりが良くわからなかったけど、とりあえず頷く。こういうのは本職の魔術師様に任せとけばいいのだ。……首痛い。つまりは自分の記憶は取り戻せるってことだろうか。

「じゃ、じゃあ僕は三途の川に——」

「なぜじゃ?」

「え？」

「おそらくお主は記憶を捜しに三途の川へ行く、と言いたいのじゃろう？ それをなぜじゃ？ と聞いておる」

「だって……」

記憶が無いのは……。

理由を考えていたのに、ここで疑問が生じたことにより思考が停止した。

——なぜだろう。

記憶が無くたって支障は無い。だって生きる術は残っているのだし、別に生前の記憶を取り戻さないといけない、という道理は無い。そのまま三途の川で生きていればいいのだ。

「なぜお主は記憶を捜す？」

アリスの眼光は鋭い。

自分の中の薄っぺらい嘘では、すぐに見破られる、そんな気がした。

「だって、……記憶の無い僕は”僕”では無いから」

「ほう？」

ただ、考えたりせず、脊髓反射のように浮かび上がった思いを言葉に変えるシンに、アリスは無表情を張り付けたまま、首を傾げ、尋ねた。

「確かにこのまま記憶を捜さずにいて支障は無いです。だけれど、そうしたら、僕があちらの世界にいたことを否定することになります。それは”僕”じゃないんです。今と過去があるから今の”僕”がいると思います。だから——」

「記憶を捜す、ということかの」

「はい」

そうか、と呟いてアリスは、シンから視線を逸らし、自嘲するような表情を浮かべたかと思うと、再びシンに視線を戻した。

「解った。その旅。ワシもついて行こうぞ」

アリスさんは満足気に微笑み、立ち上がった。

「……い、いやあ、あの……別にアリスさんに手伝わせるわけには
——」
他人のアリスさんに自分の我がままを手伝わせるわけにはいかな
い。

これはシンの問題で、アリスさんには関係の無いことなのだから。
名前も貰って、さらには行動指針をくれた人に、これ以上迷惑をか
けられはしない、かけたくはない。

「お主は馬鹿か？」

途端、翠雨が噛み付こうとするが（比喻表現とかじゃなくて）、
シンは手で制す。

いきなり、馬鹿呼ばわりされるのは流石にほんの少し怒りを覚え
たが。

なぜかアリスの表情には呆れが浮かんでいた。

「お主はここからどうやって、三途の川へ行くつもりじゃ？」

「……………」

「それに、三途の川がどういう状態で、どんな場所なのかお主は知
らないじゃろう？」

……それは、的を射ている。馬鹿は僕だった、と猛省するしか
ない。なんとも情けない、と思いシンはうな垂れた。

はあ、とアリスはため息をつき、

「だいたい防衛手段が無いお主が行っても死ぬだけじゃ。……日和
すぎではないかのう？」

何一つ言い返せないのが悔しい。それ以上に情けない。

アリスがそう言うことは、三途の川は治安があまり良くない
のだろう。そんなところに放り出されたら、非力なシンでは対処す
ることが確実に出来ないことは必須だ。

「そこは私が旦那様——いえ、シン様の身は妻が守りぬきますので」
翠雨が言葉を返す。彼女も付いて来る感じなのか。普通なら『僕
が守る』くらい言わないと駄目だと思うが、情けないが、頼りにす
るしかなかった。早いところ記憶を見つけ、彼女らの迷惑にならな

いようにしなければならない。

もう、結婚のくだりは気にしないことにした。語尾のようなものとして認識しておく。

「ふん、どっちにしろこの世界から出るにはワシの許可がいるのじや！ ワシを連れていかないと許可しないんじや！」

……あれ、五百歳。

「ち。シン様と私の新婚旅行の邪魔をして姑気取りですか？ あなたは老後のために年金もらって、独り寂しくココで暮らせばいいんですっ！」

「いやじゃ！ いやじゃ！ もうココには飽きたんじや！ 暇なんじや！」

年長者が駄々をこねた！
やけに板に付いていた！

「独りで別行動すればいいじゃないですか。これだから子供は……まあ私とシン様との子供は世界一格好良くて凛々しくて可愛くて遅しくて、……あ、シン様。名前はとうします？ とりあえず、男の子だったら——」

「ワシはもう大人じゃあ！ 子供扱いするでないわあ！」
だれか止めて。この混沌を。

……あ、そうだ。

旅の仲間にツツコミをいれよう。うんそうしよう。言い争っているのを尻目に、シンは遠いものを見るような目をした。

これ、このまま三人で行くことになったら、自分の精神がガリガリと削られていくようなビジョンが”なぜか”容易く浮かぶのだ。

「シン様！」

「はい！」

翠雨がいきなり大声をあげた。

驚いて、僕は現実へと呼び戻されてしまった。

「子供は何人が？ ——じゃなくて、いや、私は何人でもいいですけど……とうします？ ロリババアを旅に加えますか？ ついでに

私の意見は、いれるのは嫌です」

「ワシは子供じゃあないわ！」

「えー、胸ペツタンコのくせに良く言えますね。ふふふ」

そう言つて、翠雨は、セーラー服のネクタイを緩めた。すると、翠雨の髪と同色で、白雪のような美しい肌が露わになった。アリスさんも、翠雨も美肌だな。とか、分析している自分がいた。これがおそらく無心の境地というやつだろう。すべての世界から現実逃避できるという技なのだ！

「な！ こ、これはっ！ 歳をとったらワシだつてボンキュツボンじゃ！ 爆発するぐらい大きくなるんじゃ！ 主の貧相な胸など比べ物にならないほどにな！」

完全に蚊帳の外なシンだった。まあ、内にいるよりは圧倒的にいいんだけど。

出来れば男の前でその話はやめてほしい。反応にひどく困るから。「なっ！ 貧相つて私は標準です！ 壁の人に言われたくないです！ だいたいシン様は極端な胸じゃなくて、私みたいな綺麗な形のが好みなんです！ ……ですよね？」

僕に話を振らないでくれと、シンはげんなりする。

言われてみると思わず翠雨の胸へと視線を向けてしまった。

確かに翠雨の胸は癖、というか特徴はないが、形が整っていていいわゆる、美にゆ……。

すると、シンの視線に気付いたようで、翠雨は勝ち誇つたように、アリスへと視線を向けた。

アリスの”ソレ”はまな板のようで、将来を期待するには相当に乏しい。五百年という長い年月の積み重ねは、必ずしも脂肪を重ねるわけでは無いようだ。

「くっ……。じゃあ今から主のとワシの、どちらが勝つておるか、シンに決めてもらおうなのじゃ！」

……え、なにこの流れ。

「解りました。自分の胸のあまりの拙さに泣き言を言っても遅いで

すからね！」

「上等じゃ。負けをみるのは主だということを証明してやろうぞ！」

この言葉を皮切りに、二人は一斉に自分の服へと手を掛ける。

アリスは、元々はだけている着物を掴んで下へと。

対する、翠雨はセーラー服の下を掴んで上へと――。

「馬鹿あああああああああ！」

絶叫した。脳内ではずっと、「まてまてまて……」と、連呼していた。思わずシンは二人の頭を叩く。

バス、という音がして両者の動きが静止する。その瞬間両者から、別種の、しかし、良い香りがシンの鼻腔を撃った。

意識が飛ばされるのを唇をかみしめて、ギリギリ堪えて、二人を睨む。

「なんじゃ。主はワシに発情したのかのう？　ん？　ん？」と言っていたが無視。

「私です！」と、翠雨が噛み付いていたがこれも同様に。

「ちょっと静かにしてください……。申し訳ないことなんですが、アリスさんは本当について来てくれるんですか？　翠雨も。あと、胸の大きさはその人によって似合う大きさが一番いいんです。比べるものじゃありません」

「うむ。そう言っておるじゃろう。ワシはじゃから元はきよにゆ――

――妻として当然です」

「……解りました。じゃあお願いします」

シンは二人に感謝の念をこめ、一礼した。

さて。楽しい旅になりそうだ。なんだかんだで、この二人がいれば、賑やかな旅になりことは必須だろう。頬が緩むのも、致し方の無いことだ。

「じゃあ、そろそろ出発しませんか？」

まだ見ぬ地、三途の川。

好奇心がうずいて、シンを急かす。どんな所なのだろうか。どん

な生物、人がいるのだろうか。次々と浮かぶ言葉で、まだ見ぬ世界に飛び込む恐怖を相殺する。

「まあ落ち着くのじゃ。……ほれ」

アリスさんがシンに何かを投げた。「おっと」と漏らして受け取る。

質量のあるそれは、彼の腕にズシリと重さを感じさせた。

それは刀。

黒の鞘にツバ、金色に光るツバ止め。柄は白く、握ってみるとテープのような物で巻かれており握りやすい。

一見、何の変哲も無い刀だった。

シンがそれを抜くと、銀の刃が、落ちてきた蛍光灯の光で刃反射し、光り輝いた。

「満足かの？ まあ、護身用に使うとよからうて」

「何から何までありがとうございます」

と、嬉しそうに言った。アリスさんが表情を崩すのは珍しい。そんなにスゴイ刀なのかな。そんな物貰っても、緊張してしまうだけなのだが。そう思いながら刀を握った。やけに手に馴染んだのは僕の気のせいだろうか。そして、三途の川で、銃刀法違反で捕まったりしないだろうか、現実的なことを考えてしまった僕だった。もしそうなら、レプリカです、と言い張ろう。

もう一回礼を述べて、付いていた黒の紐を肩にかけ、刀を背負う。なにやら、テンションが上がった。シンは、武士の血を引く日本男児なのだ。

「良かったのう。で、お主は——自分の顔。覚えとるかの？」

アリスが胸元から取り出した鏡に映ったのは、やたらと美少女な女の子だった。

アリスと同じ黒髪は肩付近で切られ、同色の優しげな瞳は何処か

不安を内包しているかのように揺れている。

細く、女性的な体のラインを持ったその子は今のシンの記憶の中に存在してはいなかった。

辛うじて彼女は、翠雨より——もしかしたら遠近法で翠雨よりは小さいかもしれないが、最低でもアリスさんよりは高い自信がある——は背が高い気がする。

齡は十八くらい。

正直言つて、めっちゃくちゃ可愛い。

シンがその人に話しかけようとして動きに入ると、鏡に映った女の子も同様の動作をした。

真似しないでください。と彼女に意見を申すと、彼女も同様に口を開いた。

声は翠雨よりは低いが、女性的なソレ。

……認めよう。

彼女はシンだった——……。

「驚いたかのう？」

アリスさんが笑いを零す。

確かに疑問には思っていた。

アレがついてるけど、男のわりには高い声だなあ、とか実は思ってた。

「シン様かわいいよシン様」

翠雨は恍惚の表情を浮かべていた。

（……ん？　ってことは、この子は百合っ子だったりするんだろ
うか）

世の中にはいろいろな性癖の人（？）がいるのだ。というか、良く考えたら、天使って両性具有だったような。いや、詮無きことかとシンは断じた。

「じゃ、そろそろ行くかの。よいかの？　心の準備は？」

はい、とシンは答えた。

鏡に映ったその顔は、不安と期待で彩られていた。

そして、アリスは翠雨にも視線を送った。

「当たり前です」

「そうか。……じゃ。行くかのう。くくく。楽しみじゃ」

パチン、とアリスさんが指を鳴らすと、何処かで見たような渦が発生する。

あれだ、虹を汚くしたようなこの色。そして、抗えない引力。

この渦にはロクな思い出が無い。なんでここに、っていうか、う？

「すみません。やっぱ大事ですよ心のじ——うぎゃあああああ

あああああああああああ！」

再び引力はシン達を引っ張っていった。

横目に映った翠雨とアリスさんは慣れた様子で、渦に飲み込まれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1754ba/>

三途の川へようこそ。（仮題）

2012年1月4日14時49分発行